

# 意味の存立構造論に向けて

—コミュニケーションにおける意味の規則性—

角 知 行

## 1. なぜ〈意味〉なのか

私たちの生きている世界は諸々の〈意味〉によって取り囲まれており、私たちの生活はそうした〈意味〉の了解過程として成り立っている。私たちを取り巻く諸々の社会事象は〈意味〉の織り合わされた総体としてあるのであり、その中に私たちの現実の生活があるといえるだろう。従って諸々の社会事象を解明し、社会生活の一側面を明らかにするためには、織り合わされた〈意味〉のモザイクを解きほぐし、〈意味〉の存立機制を問い直すという作業が要請されるはずである。この作業によってはじめて〈意味〉は自らの自明性を解体され、その構造性と歴史性が露呈されるであろう。

〈意味〉は広汎に、また多重的に存在しているのであって、それらを総括して論ずることは容易ではなく、また一般論にとどまる危険性をもっている。そこで本稿では〈意味〉を問うための一つの基礎的作業として言語的意味、つまり分節化された音声もしくは文字を担荷体とし、しかもそれと根源的な結合関係にある〈意味〉を取り上げることにする。それは言語のもつ長い歴史性や社会生活における根底的役割を顧るとき、言語においてこそ〈意味〉が最も高度に規範として自己形成を遂げていると考えられるからである。言語的意味は〈意味〉の基核を成していると同時に、〈意味〉の一典型を示している。言語的意味についての探究は、他の〈意味〉の探究にとって一つの範型を示しうるだろう。以下では〈意味〉として言語的意味を祖上にのせ、〈意味〉の一存在様式を探ることにしたい。

言語的意味が規範として高度に自己形成を遂げたものである以上、そこには規則や法則が慣習的に成立しているはずである。勿論、それは現実的諸条件を一定捨象した上で想定できる規則であり、Chomsky いうところの理想的話者・聴者が内在的に有している規則のことである。話者と聴者との間でコミュニケーションが成り立つのは、話者が意味を音声に換えるのに用いている規則性と、聴者が音声を意味に換えるのに用いている規則性が共に同じものであるからに他ならないと考えられる。そうした規則性の中でも当然、〈意味〉に関する規則性が見出されるであろう。社会(学)的観点より言語の〈意味〉を問題とする時、言語の〈意味〉における規則性の成立が焦点として浮かび上がってくる。法則や規則として発見する言語的意味の慣習性は社会生活の中でいかにして日々生み出され維持されているのか、その基幹構造を問うことが中心的な課題となる。

だがこのことは言語的意味における規則そのものを問うことを意味しない。言語的意味の規則そのものはこれまで言語学(意味論)によって研究されてきており、一定の成果があげられている。但しそこでは法則や規則は事実として既に前提されており、その上に立って論理操作が行なわれている。その限りで言語学(意味論)の依拠する地平とは、物象化された事実を立脚点とする地平である。これに対し社会(学)的観点より言語的意味の規則性を問題とする本稿にあっては、規則そのものではなく規則の存立機制が問われなければならない。つまり諸個人の言語活動

やコミュニケーション関係が〈意味〉の規則へと凝固し転形していくその具体的過程こそが問われなければならないのだ。認識や表現といった実践活動との連関において、更にコミュニケーションという一社会関係との連関において、〈意味〉の規則性の成立を追認しようというのが本稿の基本姿勢である。

〈意味〉という一社会形象をその存在の真理としての諸関係、諸過程にまで流動化し、それを生成の論理において解明し把握しようとするこの立場が、近年広松渉氏や真木悠介氏によって展開をみている所謂「物象化論」の問題意識を共有していることは既に明らかであろう。それは、〈意味〉を活動や関係との連関において把握する上で物象化論の基本構図が一定の射程をもっていると考えるからに他ならない。尤も本稿にいう物象化とは、言語共同体という抽象的で通歴史的な社会レベルで問題にされているのであって、本来の狭義の用法が拡大的に適用されているのであり、その点は自覚されていなければならない。（尚、物象化論にもう一点関説しておけば、言語共同体というレベルで〈意味〉の存立構造を問う本稿の試みは、資本制社会というレベルで〈意味〉の存立構造—〈意味〉への疎外と〈意味〉からの疎外—を問う議論のために、一つの予備的、基礎的役割を果たしうるだろう。）

以上述べてきた問題意識を要約すれば次の様になる。社会的諸形象の〈意味〉の一範型として言語的意味を取り上げ、諸個人の実践や彼らとり結ぶ諸関係との連関においてそこに規則性が形成される様を明らかにすること。もしくは言語的意味の存立機制を明らかにすること。本稿で取り扱う〈意味〉の領域が限定的なものであることをまず最初にことわっておきたい。

## 2. 日常意識としての〈意味〉

さて私たちの日常的コミュニケーションに定位するところから議論を始めることにしよう。日常のコミュニケーションにあっては〈意味〉をもつ様々な言葉が飛び交っている。ここではそれをメッセージと呼ぶことにする。私たちの日常生活は絶え間なきメッセージの交換過程としてある。メッセージは単なる空気の振動やインクのしみとしてあるのではない。それ以上の何物か、つまり〈意味〉を担ったものとして存在している。ではメッセージが私たちの意識に対して〈意味〉をもつということ、或いは空気振動やインクのしみ以上の何物かとして映現するということはどういうことなのだろうか。別の表現でもってそれを言いかえればどのようになるだろうか。

まず第一にメッセージが〈意味〉をもつとは、そこに話し手の思想なり感情なりが表出されているということである。メッセージにおける一連の音連鎖は、それが話し手の思想や感情を受肉しているがゆえに〈意味〉をもつ。その都度の創造的活動によって〈意味〉は新たに生み出される。話され書かれた個々のメッセージにしか〈意味〉は存在しないのであり、個々の主体に対する関係としてしか〈意味〉はありえない。その限りで〈意味〉はそれを発する主体やその際の状況といった特殊具体性を刻印されている。私たちはそれぞれ独自の意味世界に生きているのであり、その表出としての〈意味〉も独自のである他ない。同じ音連鎖から成るメッセージであっても、A男が発した場合、B子が発した場合、C郎が発した場合、それぞれ〈意味〉は同一ではないだろう。また具体的なある状況においてはじめてメッセージが発せられる以上、各々の状況に

よっても〈意味〉は異なる。同一のメッセージであったとしても、家庭内でそれが発せられるとき、会社や学校でそれが発せられるとき、或いは社交場でそれが発せられるとき、それぞれ〈意味〉は異なっている。諸個人の思想や感情の表出相として〈意味〉を捉えるならば、それは具体性や個人性を帯びた一回性のものとして現われる。〈意味〉は個別的、もしくは独自のである。こうした〈意味〉の一側面は独自性としての〈意味〉、または独自の意味と呼びうるであろう。

〈意味〉がまずは独自性として現われるにしても、それだけでは〈意味〉の特質を言い尽くしていない。〈意味〉がただ独自性としてあるだけなら、〈意味〉は各人の内にタコソボ的に存在しているにすぎなくなる。〈意味〉のもつもう一つの特徴は、それが他の個人にとっても理解可能であるということである。メッセージが単なる空気振動やインクの上みではないということの第二の所以は、それが他人への伝達可能性をもっているという点に求められねばならない。〈意味〉とは流通しうる力能のこともあるのだ。この力能ゆえに私たちは自らの思想や感情を他人に伝達し、また他人の思想や感情を理解することが可能になる。こうした伝達可能性、流通可能性としての〈意味〉は通用性としての〈意味〉、又は通用的意味と呼びうるだろう。ではもう一步踏みこんで通用的意味とは一体何なのか、その本質は何なのかと問うてみるならば、それは意味諸規制のことに他ならないといえる。メッセージが何らかの意味諸規則を含んでおり、またその意味諸規則についての体系的知識を各人が共有しているからこそ、メッセージは通用性をもつといえるのである。通用的意味とは実は現実へと顕在化され実現された意味諸規則のことに他ならないのだ。

日常的意識に現われる〈意味〉の特質はまずは独自性、通用性という二点に求めることができる。メッセージが〈意味〉をもつということはメッセージが独自性をもつ、および通用性をもつという表現で言い換えることができる。ところでそうした〈意味〉がどの様にして現実へ生み出されるのかといえ、それは表現や読みとりといった活動、つまり言語活動によってである。言語活動によって〈意味〉はその都度自らを創造される。〈意味〉を更に問い続けていくためには、今や言語活動に目を移さねばならない。言語活動とはそもそもいかなる活動をいうのか。〈意味〉の二側面に照応する言語活動とはいかなるものであるのか。次節では言語活動について主題的に論ずることにした。

### 3. 言語活動の二重性

言語活動とは言語と関わり合う活動に他ならないのだが、機能的に分類すればいかなる局面がそこに見出されるだろうか。まず言語活動の諸局面を明らかにすることから議論を始めよう。

言語活動は第一に自らの思想や感情をメッセージという一つの外的対象へと外化する表現活動として捉えられる。私たち自身の独自の経験をメッセージへ結晶化し外化する過程として言語活動の第一の局面をとり出すことができる。他方表現活動によって発せられたメッセージは他の人間によって受けとられ、読みとられるわけであり、そうした読みとり活動を伴う。送られてくるメッセージを解説し、自らの経験の中に溶かし入れる活動として言語活動の第二の局面をとり出すことができる。言語活動とはさしあたりは表現活動、読みとり活動という二局面として把握さ

れうる。

だが言語は単に伝達手段としてだけ存在しているのではなく、自己に対するものとして自足的にも存在している。こうした言語は一般に内言と呼ばれている。心理学者によれば内言こそが本質的、中枢的な言語活動であるともいわれる。最も一般的に言語活動を機能的に分類するならば、表現活動—読みとり活動—内言という三局面に分けられる。それらの位置関係を図式化すれば、図1の様になる。

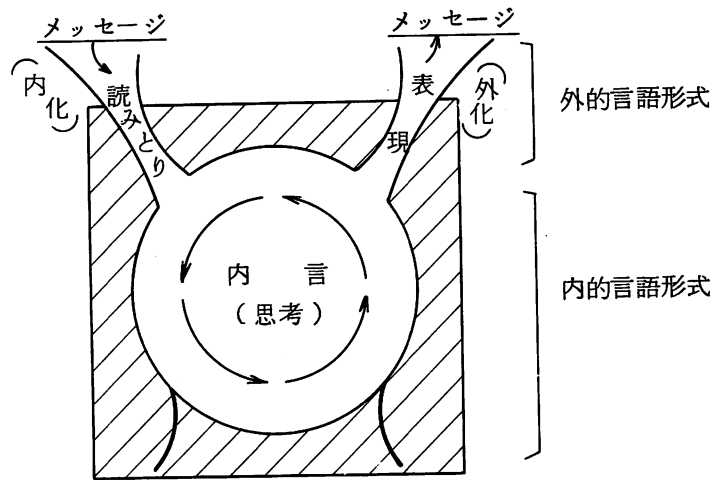


図1 言語活動の諸局面

表現活動と読みとり活動とは外的言語形式として一括し、内的言語形式としての内言に対比させることができる。これらの内、内言はそれぞれの個人の内部に自閉しているであり、それ自体を外部から観察しとり出すことは困難である。以下では言語活動の内容として外的言語形式だけを問題にしよう。この様に考えるならば、言語活動とはコミュニケーション(活動)であるといえる。何故ならメッセージの外化—内化ということは基本的には他の人間とのコミュニケーションの中ではじめて行なわれる事柄だからである。従って言語活動とは他の人間との関係性の網の目の中に置かれているという意味で本質的に社会的なものであり、協働的なものである。コミュニケーション(活動)とはメッセージを媒介として営まれる、話し手と聞き手との共同的な言語活動のことに他ならないのだ。

言語活動の諸局面はおよそ以上のように要約できるのであるが、これは次に言語活動の二重性を述べるための予備的考察にすぎなかった。前節では〈意味〉が通用性と独自性という二側面を持つことを述べた。然らば〈意味〉を生み出す言語活動にも二側面が見出されるであろう。独自の意味を生み出す言語活動とは個性や具体性を帯びた言語活動である。以下ではこれを具体的言語活動と呼ぶ。他方通用性としての〈意味〉を生み出す言語活動とは個性や具体性を捨象した上に成立する抽象的なものである。以下ではこれを抽象的言語活動と呼ぶ。この二つの言語活動の差違と特質とを、上で述べた言語活動の諸局面と絡めつつ、より具体的に見ていくことにしよう。

最初に具体的言語活動をとり上げることにする。言語活動そのものはある個人によって特殊な状況の下で行なわれる具体的なものである。田中某氏が国会において何かを述べる、佐藤某氏が会社で何かを述べる、鈴木某氏が家庭で何かを述べる、等々。そうした言語活動とは各々の意味世界に生きている個人が、自らの経験を外在化する運動である。この様にして表出された〈意味〉にはそれを発した主体の個性とか周囲の特殊な状況とかが刻印されているのであり、〈意味〉は

示差的であり、決して同一のものを見出しえない。たとえ同じメッセージであろうともそこに対象化されている発話主体の経験・思い入れは決して同じではないのだ。メッセージにおける一連の音連鎖は、それを発したその時々の特個の主体の思想や感情によって肉づけされ生命をふきこまれているのであって、その主体との関係において独自の〈意味〉をもちうるのである。(意味のこうした創造的性格をとくに強調するのが三浦つとむ氏等の言語過程説である。)同様に読みとり活動についても、メッセージの〈意味〉はそれを読みとる個々の主体との関係において独自の、一時的に存在しているといえる。私たちはメッセージを受けとることによってその字句通りの〈意味〉を理解するだけでなく、それを自らの経験の中に復原し再形象化することによって絶えず新しい〈意味〉を創造しているのだ。もしくは絶えず新しい他者一自己を見出し経験しているのである。具体的言語活動とは他との通約を許さぬ不透明なものとして、示差的、特個的な有り様をしている。

具体的言語活動は言語活動そのものであり、コミュニケーションを本質的に動機づけ、意義づけている。だが具体的言語活動そのものが通用性としての〈意味〉を生み出し、メッセージの伝達可能性を保証するわけではない。例えば極端な詩的言語を考えてみれば、それは確かに個人の経験の対象化されたものとして独自の意味をもつかもしれない。だがそれはあくまでも発話者に対してであって、受け手にとっては殆んど何の〈意味〉も持っていない。〈意味〉が伝達可能性をもつという事態を明らかにするためには、別の言語活動の質を求めなければならない。そこで次に通約の意味を生み出す限りでの言語活動、つまり抽象的言語活動に移ることにしよう。

現実に行なわれている言語活動から個性や具体性の諸規定を次々と剥ぎとっていけばあとに残留するのは、一般化され非人称化された主体がただ言語諸規則を実現したり読みとったりするという活動である。言語活動から諸特性を次々に剝離していったとしてもそれが言語活動である以上、言語諸規則を実現し読みとる活動という原層は確実に見出されるだろう。(言語諸規則といっても文法規則、音韻規則等々の様々な規則体系が考えられるが、〈意味〉を問題とする本稿にあっては〈意味〉に関する言語諸規則、つまり意味諸規則だけを想定することにしよう。)例えばA氏とB婦人とが発した同一のメッセージは、それぞれの状況の特異性とも相俟って、それぞれ独自の〈意味〉をもつはずであるが、その独自性の側面を捨象するならばそこに残るのはA氏とB婦人とが同一の意味規則を実現する活動を行なっており、同じ活動に還元されているということなのである。二人が行なっているのは、相方の内部に内蔵されている意味諸規則のうち同じ部分を顕在化し、実現しているということではかない。抽象的言語活動とは意味諸規則の単なる実現と読みとりとへ還元された言語活動のことなのである。

表現活動としての抽象的言語活動とはただ意味諸規則を実現するだけの活動である。それは各人に内蔵されている意味諸規則の一部分を発動し現前化する活動である。他方、読みとり活動としてのそれは送られてくるメッセージを内部の意味諸規則と照合し読解する活動である。いずれにせよそれらは rule-governed な活動であり、普遍的透過性へと還元された活動である。故にそれらは同質的であり、通約的である。

抽象的言語活動を行なう主体とは個性や容貌の違いを捨象された言語主体一般である。ただ意

意味諸規則を内蔵しているという規定にかなり限りでの、のっぺらな相をした主体である。つまり抽象的言語活動とは非人称化された主体との連関に置かれた言語活動のことなのだ。従って彼らによって発せられた通用的意味は発話主体の個性を取り去った上に成立しており、規範的同一性へと還元されている。

どこからどこまでが具体的言語活動でどこからどこまでが抽象的言語活動だといいうるわけではない。むしろメッセージと個々の主体との間での特異な関係づけとしての具体的言語活動と、メッセージと個々の主体との間での一般的な、規範的な関係づけとしての抽象的言語活動との二重性の中に現実の言語活動及び〈意味〉はあるというべきである。例えば見知らぬ人から「私は悲しい。」といわれても私たちはその〈意味〉を理解できない。「私は悲しい。」というそのメッセージの背後にいかなる事実があるのかを知りえないからだ。たとえ知人がその発話者であったとしても私たちはそのメッセージの〈意味〉を十全には知りえない。聞き手たる私たちがそのメッセージととり結ぶ関係は、その知人がそのメッセージととり結ぶ関係と決して同一ではありえないからだ。相方の関係が完全に重なりあうことはありえないだろう。にも拘わらず私たちは発話者が誰であろうとも「私は悲しい。」というメッセージの〈意味〉を理解できる。その字義的な〈意味〉を理解できる。それはそのメッセージに対する私たちの関係と、そのメッセージに対する話し手との関係とが他面において同一のものであり、そこに一般性や規範性が成立しているからに他ならない。〈意味〉とは理解可能性であると同時に理解不可能性であり、またその逆でもあるのだ。本節では〈意味〉のこうした両義的な性格を、具体的言語活動と抽象的言語活動という複眼的な視角から把握しようとしてきた。それは個体的なものを社会的なものへ、また社会的なものを個体的なものへと変換する言語活動をその立体性に於いて透視するためには、上の複眼的視角が必要であると考えたからに他ならない。

規則として〈意味〉を捉える言語論、例えば言語学的意味論にあってはこれまで〈意味〉はただラングの部面においてしか問題とされず、個々人の日々行なっている言語活動、もしくはパロールの間には巨大な溝淵が存在していた。少なくとも両者の間の有機的な関連が見失なわれていたといえる。本節での言語活動の二重性という論点の設定、とくに抽象的言語活動という視座の設定は、規則としての〈意味〉が単に体系であるばかりでなく同時に活動でもあることを明らかにし、両者の媒介環を見出そうとする問題意識に由来している。本論文の冒頭で規則としての〈意味〉を諸個人の実践や彼らの活動連関との関連において問題にすると述べたが、抽象的言語活動という概念はそれに答えるための一つの鍵概念なのである。だが抽象的言語活動とはいきなり存在しうるものではなく、意味諸規則と相関的に、コミュニケーション活動の中で形成されてきたものであるにちがいない。コミュニケーションという一社会関係の中から意味諸規則及び抽象的言語活動が形成されていくダイナミズム、又はその生成の論理はいかにして追認されうるだろうか。次節ではその一般的な展望を問うことにしたい。

※ 既に明らかな様に「言語活動の二重性」という視点は、『資本論』にいうところの「労働の二重性」からその着想を得ている。だがここでは、例えばテルケル派言語集団の如く使用価値の生産／交換価値の生産という点においてその二重性を継承するのではなく、活動の抽象性レベルの違

いに着目するという一点において、その区分原理を援用しようとしている。この点については丸山圭三郎〔1977〕等参照。

#### 4. 意味諸規則の形成

これまで意味諸規則、抽象的言語活動といってきたがそれらは既に生成を終えたものであり、既存のラングを前提とするものではなかったか。然り。此処に至るまでの論述が依ってたつ地平とは既にラングが存在しており、それによって人々がコミュニケーションを行なっている日常的な言語世界の地平であった。日常的言語世界における〈意味〉の規範および活動として、意味諸規則と抽象的言語活動を抽出するというのがここまでの議論の大筋であった。今やこの日常的言語世界そのものが対自化され、問い直されなければならない。意味諸規則、抽象的言語活動はいかなる論理によって自己形成を遂げ自らの存立を支えているのか。コミュニケーションという一社会関係にあって、通用的意味としての意味諸規則が独自の意味との対抗関係の中で自らの体系を築き、累進化していく過程はどの様にして追認されるのか。この問いは次の様にも換言できよう。言語共同体に内在する諸個人が〈意味〉によって自らの意識を共同主観化し、共通の意味能力を内的に形成し、相互の伝達可能性を増進していく過程はどのようにして追認されるのか。こうした問いかけはいうならば私たちが眼前に見出す社会的諸現象（例えば「国家」、例えば「資本」）の生成史を問いかけるのと同じ類のものである。

上の諸々の問いに対して本稿では次の様に答えたい。それは全体としての意味諸規則が最も単純な形態からより複雑な形態へと規定性を重畳化していく過程、又は最も小さな単位からより大きな単位へと自らを展開していく過程を follow することによって可能になると。つまり意味諸規則の全体をその抽象度に応じて分類し、相互に関連づけ、再構成することによって意味諸規則の生成史を辿ることができるというのが本稿の基本的な立場である。勿論この場合の「形成」とか「生成」ということが経験的、事実的な発生や話し手、聞き手が実際にとる手順をいうのではなく、また規則によって文を生み出すことをいうのではないことはいうまでもないだろう。それは潜在的に存在している意味諸規則の全体を論理的に再構成し順序だてることによって意味諸規則全体の形成を明らかにしようということなのである。従ってこの場合の意味諸規則の形成とは、言語共同体にあって意味諸規則が自らを生産し再生産する論理であるといつてよい。

意味諸規則の形成は具体的に個々の意味規則について見ていかねばならないのであるがここではそれを先立って全体的、一般的な見通し、又は意味諸規則の基本次元についてだけ語っておきたい。意味諸規則をその抽象度のちがいに注目して分類すれば、いかなる基本単位が析出されるか。

まず最小の〈意味〉の単位として語 (word) をとり出すことができる。これまで意味論の主要な対象は語の〈意味〉の研究であったのであり、意味論とは語の〈意味〉の研究のことであるとさえいわれてきた。日常的コミュニケーションにおける反復可能で有限な最小単位として語がまず認められてよいだろう。(尤も言語学的に厳密にいうならば〈意味〉を担う最小単位は形態素

(morpheme)であるというべきだが、その定義が未だに確立していないという事情により、また細かな言語学的議論に立入る必要はないという事情により、〈意味〉の最小単位を語に設定することにする。)では語の〈意味〉とは一体何なのか。語の〈意味〉を別の語の〈意味〉や文をもって説明する辞書の定義は一種の循環論に陥っており、語の〈意味〉を真に説明していない。これに代えて例えばJ. Lyonsは構造主義的観点より、ある単語が語彙全体の中で占める位置、又は他の単語ととり結ぶ関係を「意義」(sense)と名づけ、これによって語の〈意味〉を規定しようと試みている。つまり一次的に存在するのは意義関係なのであり、そうした意義関係の総和として個々の単語の〈意味〉が決定されるというわけである。Lyons [1977]は意義関係を対比関係(contrast)、上下関係(hyponymy)という二つの基本軸に分け、更にそれぞれを細分化して意義関係の諸タイプを求めている。意義関係の総体は話し手と受け手がそれを知っていなければならず、またそれに従わねばならないという意味で語彙における規則、つまり語彙規則と呼べるだろう。語彙規則の成立はそれまでのっぺらぼうとした連続体でしかなかった対象像に分節化模様の形式を与えるという点で新しい認識の成立を意味している。語彙規則がどのような順序で成立するののかという問題は、認識の問題とも関連して極めて興味ある問題である。

語の〈意味〉が最小の単位としてまず認められるにしても、それだけで日常のコミュニケーションにおける〈意味〉が全て説明されうるわけではない。一つ一つの語がたとえ〈意味〉をもっていたとしても、それらをただバラバラに連ねただけでは有意味なコミュニケーションは行なわれない。パラディグマティックな言語宇宙に配列された語の〈意味〉をシンタグマティックな言語宇宙へともたらずに際しては一定の規則に従わねばならない。個々の語はまず文法的に正しく組み立てられる必要がある。この過程は統語論によって扱われる。こうして文が派生されるがその文は文法的には適格であるにしても依然として意味的な変則性やあいまい性が含まれている。そうした意味の変則性やあいまい性を探知すべく文に意味解釈を行なうのは意味論の分野に属している。今や意味諸規則のもう一つの上の単位として文(sentence)を想定すべきである。文に意味解釈を与える諸々の規則は、統語次元における意味規則という意味で、統語-意味規則とよべるだろう。

例えばJ. J. KatzとJ. A. Fodorは個々の語の〈意味〉を合同化しつつ文の意味解釈を生み出す規則を「投射規則」と呼んでいる。投射規則とは辞書によって与えられた各々の語彙項目の意義を合同化し、文の読みを合成していく際に適用される規則のことであり、主語-動詞、動詞-目的語といった文法関係の数だけ存在する。投射規則とは語の〈意味〉と語の〈意味〉との結びつき方に一定の制限を与えるものであり、その意味で、語の結びつくところに成立する「判断」に基本的な形式を与えるものであるといっておくべきだろう。

これまで語の〈意味〉と文の〈意味〉とを見てきたわけであるが、それらだけで日常的コミュニケーションにおける〈意味〉を十分に説明しうるだろうか。次の一文をみてみよう。

① 「君は本当に頭がいいね。」

あまりに出来の悪い生徒に向かって教師がこれを発したとしよう。この時、①が文字通りにその生徒の頭脳の優秀さを述べている文でないことは明らかである。むしろ逆に①は次のことを述べ



ている。

② 「君は本当に頭が悪いね。」

かように考えるならば①の〈意味〉は、ただ語や文の〈意味〉だけに解消させることはできない。

私たちが文を発するのはそれによって「言明をする」、「忠告をする」、「挨拶をする」、「質問をする」等々といった何らかの行為を遂行するためであり、そうした行為の〈意味〉が正しく理解されてはじめてコミュニケーションは十全に成立するといえる。先ほどの例で言えば①は「皮肉をいう」という行為であったのである。各々の文は語や文の〈意味〉を担ったものであると同時に、全体として話し手の意図を表出している。こうした〈意味〉の層は発話(utterance)の〈意味〉とよぶことができ、そこにおける意味諸規則は発話規則とよぶことができる。

発話規則とは一体いかなるものであるのか。例えば J.L. Austin は発話が有効となるためには慣習的手続きの存在、人物及び状況の適合性等の条件が満たされていなければならないとし、それらを欠く場合を「不適切性」として幾つかの場合に分類している。また J.R. Searle は Austin のこの考え方を継承し、発話には命題内容規則、予備規則、誠実規則、本質規則という四種類の規則がありそれらにのっとることによってはじめて発話は有効性を得るとしている。発話規則によってはじめて私たちは自らの意図を他人に伝達し、他人と協働することが可能になる。

これまで〈意味〉の基本的単位を問うて語・文・発話という単位を抽出し、それぞれにおける意味諸規則として語彙規則、統語一意味規則、発話規則を見出した。〈意味〉の単位は更に discourse とか paragraph とかへ拡大することもできようがここでは発話を上限とすることにする。それは発話によってコミュニケーションは原則的に可能となっており、発話をコミュニケーションの基本的な一単位とすることはそれなりに根拠のあることだと思われるからである。日常生活の中を飛び交っている種々のコトバをこれまでメッセージと呼んできたが今やその単位は発話であるとしなければならない。発話を一単位として日常生活の中を飛び交う言葉がメッセージであるのだ。

※ 〈意味〉の次元を語一文一発話という三次元、又は語・文一発話という二次元に分位する視角については竹内芳郎〔1978〕、西山佑司〔1978〕等参照。

この様に考えるならばメッセージには三つの〈意味〉、つまり語の〈意味〉、文の〈意味〉、発話の〈意味〉が対象化されている。とくに通用的意味としては語彙規則、統語一意味規則、発話規則という意味諸規則が埋めこまれている。〈意味〉の三重的入れ子構造としてメッセージを捉えることができよう。メッセージが各人の間を飛び交う通用性または流通力能をもつのは、そこに三重の意味諸規則が埋めこまれているからであり、またその意味諸規則が各人の内部に同質的に備わっている意味諸規則体系の一部であるからである。無限のメッセージの〈意味〉が理解可能なのはそれが意味諸規則の部分的な発動=現前化であり、有限の意味諸規則へと還元することが可能だからである。

同時に〈意味〉を生み出す言語活動も三重的なものとして理解されねばならない。抽象的言語活動について見るならば、それは語彙規則の実現一読みとり、統語一意味規則の実現一読みとり、

発話規則の実現—読みとりという三重性において成り立っている。日常的なコミュニケーションにおいて〈意味〉の理解を支えているのはまさにこうした三重的行為として遂行されている言語活動であると理解されねばならない。

意味諸規則は社会的な相において存在しているゆえに、それを用いる抽象的言語活動によって言語主体は絶えず社会的な意識へと係留される。言語主体は対象把握の仕方を他と分一共有しているのであり、自己を絶えず言語主体一般として自己形成しているのである。それと同時に意味諸規則はパロールへと絶えず流動化されることによって自らを諸主体の意識へ還流し自己の存在を支えている。こうした意味でメッセージによって意味諸規則を実現し読みとる活動は言語主体一般として主体を再生産する活動であると同時に、ラングとしての意味諸規則の存立を支える活動であるといつてよいだろう。

以上前節で抽出した抽象的言語活動および意味諸規則という概念は、基本的には語一文一発話という里程を辿ることによって自らの形成過程が追認されるだろうという一般的な見通しを述べてきた。この形成過程は各次元での個々の意味規則に即して具体的に研究されねばならず、それは今後の課題である。この過程を通じて意味諸規則は自らを構成している諸規則を次々と明らかにしていくことによって自己の全貌を露呈していくのであり、また抽象的言語活動も自らの形成、もしくはその抽象性の進展をあとづけることができるのである。この点よりすれば先の抽象的言語活動、意味諸規則という概念は空疎な概念であったのであり、次々と把え返しを受けて内容を豊かにしていくことによって再指定されるべき概念でしかなかった。それらは過程又は運動として把え返されねばならず、その意味で説明されるべき対象なのである。

だが同時に抽象的言語活動、意味諸規則という概念はその具体的考察—今後の課題としての—に先立って、前提として第一次的に指定される必要がある。それらはコミュニケーションという一社会関係から語彙規則、統語—意味規則、発話規則といった意味諸規則が次々と析出されていく論理を説明する上で必要な契機を成しているからである。例えば語彙規則にしてもそれは意味諸規則の全体を前提としてはじめて形成されることができる。なぜなら語彙規則が社会的な相で成立するためには諸個人の間でのコミュニケーションが必要であり、そのコミュニケーションのためには各々の言語主体が自らを他へと関係づける意識、つまり通用性としての意味意識が必要だからである。通用性としての意味意識のためには既に意味諸規則が全体として存在していることが要請される。私たちが眼前に見出す一つの規範—活動としての意味諸規則、抽象的言語活動は理論の展開にあたっては説明されるべき対象であると同時に前提でもあるのだ。本稿でそれらを取り上げてきた所以はここにある。

意味諸規則の形成の最も一般的な経路、及びそれらのもつ意義を図式化すれば図2. の様なトリアーデが描かれるだろう。この図のⅠにおいては日常的意識のレベルで捉えられた通用的意味＝意味諸規則とその実体として抽象的言語活動が第一次的に指定されている。Ⅱでは意味諸規則の全体が語彙規則—統語—意味規則—発話規則という順で再構成されるのであり、またそれぞれの規則が1個、m個、n個の規則より成っていることが示されている。それは意味諸規則の内容が明らかにされていく過程であると同時に、抽象的言語活動が次々と形態規定をうけることによ

って把え返されていく過程でもある。Ⅲにおいては意味諸規則の形成という媒介を経た上で、自らを開示しおえた意味諸規則及び抽象的言語活動が新たな次元で再指定されることが示されている。意味諸規則の形成過程は最も巨視的には図2の様に展望される。

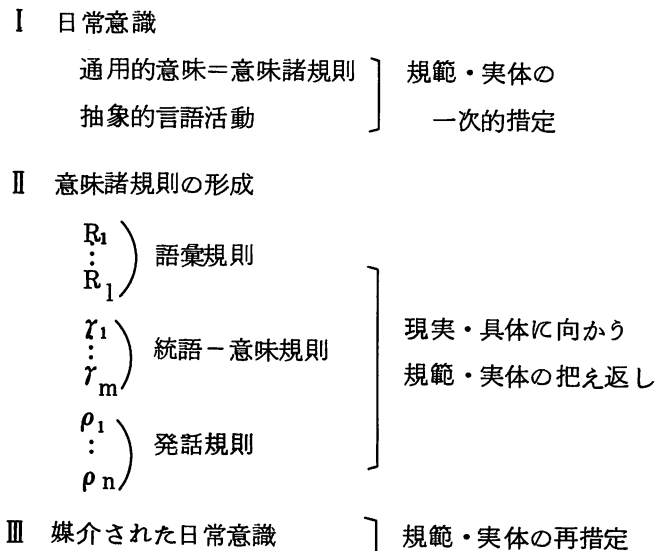


図2 意味諸規則の形成

この様にして構想される意味諸規則の形成とは、規範や活動をただ記述するだけの議論やそれらを発生的・歴史的にあとづけようとする議論とは地平を異にする。意味諸規則の形成とは意味諸規則をその抽象度に応じて相互に関連づけ—最も一般的には語彙規則、統語-意味規則、発話規則といった具合に。更にはそれぞれの内部で各々に含まれている諸規則を関連づけ—内的な連関を明らかにすることによって、意味諸規則を共時的な位相で論理的に再構成し、その存立と再生産のメカニズムを明らかにしようとするものである。そして何よりもそれは意味諸規則の生成史を、新たな認識や新たなコミュニケーション関係の創出という観点から見ていこうとするものである。或いは諸個人の意識における伝達可能性の成立過程を、共時的位相における意味諸規則の形成の論理に即しつつ、具体的に見ていこうとするものであるといってもよいだろう。眼前に存在している規範—その実体を前提としつつ、諸個人の実践やその連関からそれらが形成され、生成される過程を共時的、論理的に再構成し論述しようという方法は存立構造論的アプローチと呼ぶことができる。〈意味〉をとくに社会的な側面から探究するに際してこの方法は一定の射程をもちうるものと予想される。

## 5. 小 括

本稿の問題意識は言語的意味の規則性について、その基幹的な存立機制を探るということであった。この問題意識に対してここまで、規則としての〈意味〉が関係規定をうけた言語活動に他ならないこと、もしくは言語活動=コミュニケーション活動が関係としての〈意味〉を形成し再生産していることを述べ、体系としての〈意味〉と活動としての〈意味〉との間に一定の連関を

見出そうと試みてきた。これまでの言語論にあっては〈意味〉は一方で諸個人の活動又は創造行為として把握され、他方で体系又はラングとして把握されてきた。そして両者の間には超えがたい溝が存していたといえる。本稿での試みは〈意味〉と言語活動とにおける二重性、及び意味諸規則の形成という論点に依拠しつつ、上の分断された二つの潮流に架橋しようという一つの試みであったわけである。

最後に今後の課題を語ることによって本稿を結ぶことにしよう。ここでは「意味の存立構造論」が言語的意味についての閉じられた体系を成しているものとし、その限りで「意味の存立構造論」の今後の課題と方向を述べることにしたい。つまりここでは〈意味〉は言語的意味に限定されているのである。今後の課題を最も一般的にいうならば、意味諸規則の形成を個々の意味規則に即して具体的に探究していくことであるといえる。これまでの論述は単なる一般論にとどまっていたのであって、意味諸規則—抽象的言語活動そのものがただ抽出されたにすぎない。その具体的な考察にはまだ立ち入っていないのである。先ほどの図2. でいうならば本稿の依ってたつ地平はⅠ. の次元であり、そこからⅡ. 以降の展開を見渡しているにすぎない。従って今後の基本的な方向は、個々の意味規則の形成を追認することによって、意味諸規則—抽象的言語活動の形成をあとづけ、それらを次々と把え返していくことでなければならない。語、文、発話の諸次元にはどのような意味規則があるのか、またそれらはどの様に関連しているのかが問題とされなければならない。（前節でLyons, Katz-Fodor, Austin, Searle に即してその一例を見たのだが。）このためには言語学的な意味論により深く沈潜することが必要となるだろう。だが同時にそれらの意味規則が諸個人の認識や彼らの関係に対してもっている意義が問われなければならないのであって、そのためにはシンボル論や哲学における言語論が関係してくるだろう。そうした意味論や言語論を素材とし対象とすることによって、言語的意味の規則性を解明するという作業のより具体的な展開が展望される。本稿はそうした今後の展開のための一つの足場もしくは思想的拠点を構築し呈示しようという試みだったのである。

付 記 この小稿は筆者が東京大学大学院社会学研究科（Bコース）に提出した修士論文「〈意味の存立構造〉序説—コミュニケーションの観点から—」を「第二章〈意味〉の存立機制」を中心として要約したものである。紙幅の関係上議論が不十分であり、難澁化、短絡化をきたしているのではないかと懸念される。大方の批判と叱正を頂ければ幸いである。

## 参 考 文 献

- Austin, John L. 1960 How to Do Things with Words, Oxford. = 1978 坂本百大訳『言語と行為』, 大修館書店
- Chomsky, Noam 1965 Aspects of the Theory of Syntax, The M.I.T. Press. = 1970 安井稔訳『文法理論の諸相』, 研究社
- 広 松 涉 1972 『世界の共同主観的存在構造』, 勁草書房
- Katz, Jerrold J. & 1963 "The Structure of a Semantic Theory", Language  
Fodor, Jerry A. 39: 170—210, Reprinted in Fodor & Katz, (eds.)

- 1964 The Structure of Language, Prentice Hall:  
479-518
- Lyons, John 1968 An Introduction to Theoretical Linguistics, Cambridge University Press. =1973 国広哲弥監訳『理論言語学』, 大修館書店
- Lyons, John 1977 Semantics, Volume I, Cambridge University Press.  
真木悠介 1977 『現代社会の存立構造』, 筑摩書房
- 丸山圭三郎 1977 「貨幣と言語学のアナロジー」『現代思想』 vol.5-11: 77-89.
- 三浦つとむ 1971 『日本語はどういう言語か』, 季節社
- 西山佑司 1978 「意味することと意図すること」『理想』No.546:93-107.
- Searle, John A. 1969 Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language, Cambridge University Press.
- 竹内芳郎 1978 「言語意味論」『展望』, NO.232:126-144. NO.233:129-148.

(すみともゆき)

# 季節風

—〈科学〉の風はどこから吹くか?

信じるということ／桜井正 マルクス主義〈経営学〉は何をめざすか／酒巻賢治 劇発生論・序／照井育子 《写真》から《写真表現》へ／佐藤元洋 学問の方法について／丸山政利 渡辺啓著『認識論と弁証法』ノート(上) 酒巻賢治 コラムその他

本誌は〈三浦つとむ通信No.3〉における酒巻の提案「手習草紙」を創刊する夢が契機となって生れたものです。本誌の目的は、個人的な創造のぎりぎりの場所で学問・思想活動を進めておられる全国の諸氏が、それぞれの考えを気軽に発表し、のびのびとした議論をかわせるような〈場〉を確保することにあります。

4月中旬創刊予定!! 350円(予約分三冊1000円) 住所 〒194-01 町田市山崎団地4-12-104 酒巻賢治方 「季節風編集委員会」 振替 東京3-37846 Tel 0427-91-9480